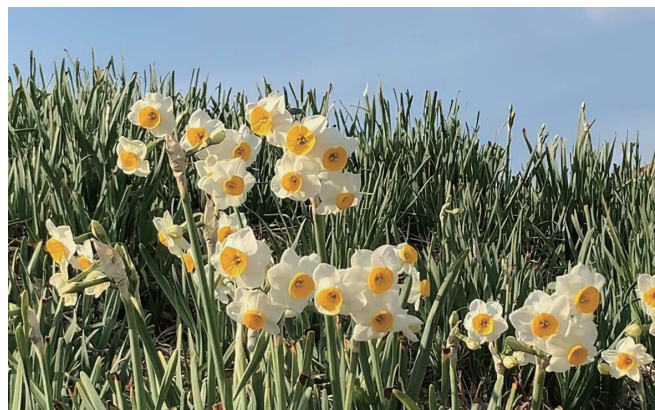


あとがき

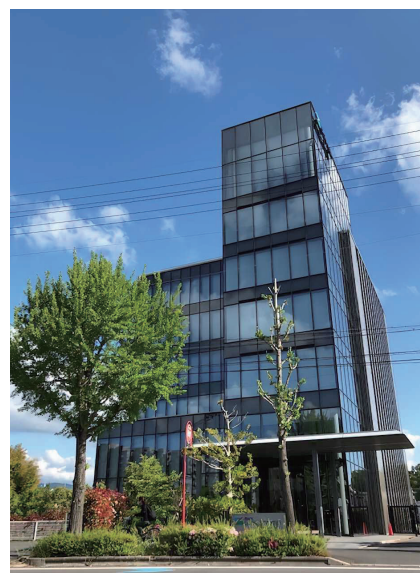
いかがだったでしょうか？
奨学生の皆さんに寄せていただいた原稿をととても興味深く拝見しました。
オンライン交流会の中では見えなかったそれぞれのご苦労や努力、
未来の捉え方を垣間見ることができました。
コロナ禍はまだ当分続くことでしょう。
今まで当然であった人との繋がり、自由な距離の移動が制限されています。
しかし、有難いことに産業や社会生活の基盤となるものは変わらず動いています。
自分の描いた夢を実現するため、コツコツとその目標に向かって努力を続けましょう。
この状況を乗り越えて、皆さんの笑顔に会えることを心から願っています。



▲オンライン交流会会場の様子



▲早春を告げる花 スイセン



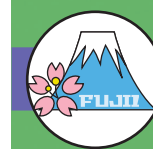
▲グローバルセンター全景

発行日：2021年2月

発行：公益財団法人 藤井国際奨学財団

住所：〒567-0034 大阪府茨木市中穂積 3-12-2 ☎：072-621-7601

※当広報誌の文章・画像等の内容の無断転載及び複製等の行為はご遠慮ください。



アジア発展の架け橋となれ！日本で学ぶ金の卵たちへ

公益財団法人 藤井国際奨学財団

かけはし

Vol.12

2020年度 奨学生交流会

オンライン交流会



オンライン交流会の開催

今年の奨学生交流会はコロナ禍のために従来のように一同会してのイベントができなくなり、Zoom アプリを利用したオンライン交流会として開催されました。オンライン交流会には当財団から奨学金を給付している国内学生から 18 名、外国人留学生 13 名、財団の藤井理事長、理事の竹谷先生、毎年秋に奨学生を選考していただいている先生の中から多胡先生、瀬口先生、久保先生にご参加いただきました。

まず、藤井理事長のご挨拶や先生方のご紹介が行われ、各自昼食を摂ってもらったあとに懇親会が始まりました。奨学生の自己紹介に続いて 5 チームに分かれての「謎解きゲーム」に挑戦しました。チームリーダーを中心にチーム内でのミーティングタイムを 3 回設け、3 問中 2 問は全チームが正解。3 問目は難問でみんな苦戦していました。

今回はオンラインで時間の制約もありましたが、カメラの向こうのみんなと時間と感情を共有できるコロナ禍ならではの交流会になりました。次世代エネルギーであるスピントロニクスや新情報処理プログラムの研究、IT を駆使した医療機器システムの開発など新しい世界を求める奨学生たちに明るい未来を感じました。

この閉塞感が漂う時代に自分がどう感じどう行動するのか？
そして自分らしさをどう表現していくのか？
奨学生の皆さんには「人間力」を養う時間であってほしいと思います。



▲ 藤井理事長 ご挨拶



奨学生選考委員
多胡先生



奨学生選考委員
瀬口先生



奨学生選考委員
久保先生



奨学生選考委員・理事
竹谷先生

2020 年『今』私が思うこと

新型コロナウイルス感染拡大で世界全体が重苦しい空気に包まれた一年。
先行きが不透明な『今』皆さんが思うことを自由にご寄稿いただきました。



福本 直輝

今年は全世界の人々が壮絶な“我慢”を強いられた 1 年だったかと思います。同時に当たり前だと思っていた沢山の隠れた幸せに気付いた方も多かったのではないのでしょうか。お別れや新しい出会いの機会そのものや、お店ならお客さんが来てくれるということ自体が今では贅沢なことのように感じます。しかし、それが今の当たり前であり、新しい生活様式を受け入れていく必要があります。それは弱い人達を守るためです。そのための不安や生活上の困難をどれくらい受け入れられるかは人によると思いますが、こういった状況を乗り越えるためには、ユーモアがあってポジティブなことを見つけていくことが大切だと思います。僕はポジティブなこととして将棋を始めました。今はアマチュア初段を目指しています。研究室に着いたらまず 1 局オンラインで指します。卒論提出か初段昇格かどっちが達成できるか楽しみです。



奥村 友香

2020 年は自分の生活や考え方が大きく変化した一年でした。本来、2020 年は東京オリンピックが開催され、私自身は就職活動や研究活動に励みながらも最後の学生生活を有意義に過ごしたいと考えていました。しかしコロナウイルスにより、就職活動や授業などはオンライン化が進み、私生活でも旅行や遊びに行くことが憚れる時代となりました。コロナウイルスによって不便に感じることが多いですが、その中でも時間は止まってくれません。この時代を前向きに捉えることが今必要だと考えています。例えば、オンライン化によって、時間や場所にあまりとらわれずに参加できるようになりました。私自身は自粛期間だからこそ十分に自分の時間を取ることができ、学校の研究のみならず自主学習にあてる時間ができました。残り少なくなった学生生活を嘆くだけではなく、少しでも自分が成長できるよう前向きに行動し、将来は社会に貢献できるよう努力したいです。



顧 嘉棟 (中国)

新型コロナウイルスの影響で、多くの人にとって 2020 年は恐らく大変辛い一年でしょう。経済上の困難に悩まされて退学を余儀なくされた学生や経営状況が厳しいという理由で会社に解雇された社会人のことを目の当たりにして、自分が中国にいる家族と藤井国際奨学財団のサポートのおかげで、まだ勉学を続けられることに対して、幸運と感謝の気持ちでいっぱいです。また、自分は外国人留学生という身分なので、他の在日外国人の現状についても気になっているのです。私は今、大阪大学附属病院が主催する医療通訳要請コースを受けていて、そこで医療従事者として働く講師と接触する機会が多くて、彼達の話によるとコロナの影響で母国に帰れない外国人患者が増えてきているようです。そのような患者の中で、日本人医師との意思疎通が困難な方も沢山いるので、医療通訳への需要が高まってきていると言われています。将来医療通訳士になるのを目指している私は、訪日外国人がどんどん増えていく可能性がある将来に向けて、自分の語学力を活かし、医療の現場において外国人患者の頼りになれるよう努力していきたいと思います。



谷 昌紀

2020 年はコロナの影響で大半の授業がオンラインになりました。オンデマンドの講義では、何度も見返し理解を深めることができました。それでも課題を解決できないときは、ラインで友人達と疑問点を共有し意見交換をしました。アルバイトやサークルなどの課外活動への参加は全くできませんでした。しかし、空いた時間に企業のオンラインインターンシップや研究室見学などに積極的に参加することができました。この経験は長所や短所、学びたいことなど、私自身を見つめ直す機会を与えてくれました。コロナの影響でアルバイトもなく、食べることに困っている方がいらっしゃると思います。そんな時に大学生活を継続し、インターンシップや研究室見学を通して、自分自身を見つめ直すことのできる私は本当に恵まれていると思います。これもひとえに貴財団からご支援頂いているお陰です。そのことに感謝し、今回の経験から学んだことを活かして、自分自身にとって悔いの残らない大学生活を送ります。



田中 大裕

2020年に思うことは変化こそ多かったが必要とされるものは大きく変わらなかったのではないかと点です。

私はこの春に高校生の時から行きたかった研究室に配属されました。しかし、前期の間はオンライン越しのミーティングがあるのみで研究というもののへの実感がわいていませんでした。

しかし、実感がわかないなりに自分がオンライン越しに研究に多少なりとも参加できたのは、今までの自分が大学や高校以前に身に着けたもののおかげでした。世間ではアフターコロナなど、コロナで世界が大きく変わったかのように言いますが、結局仕事や研究に必要なスキルといったものが大きく変わることはなく、今迄に身に着けたものこそが重要ではないかと考えるようになりました。

その意味で、はやりすたりに左右されない知識を大学で身に着けることができたのはやはり大きな意味があるなと思います。来年度私は大学院に進学しますが、そこでも変化の多い社会に残っていくために時代によらない確かな知識や経験を蓄えたいと思っています。



中尾 芽吹

2020年は『変化』の1年だった。コロナで人との繋がりが切り離され、バイトも全員解雇された。

しかし、私のなかでの一番大きな変化は父が難病になり、余命わずかということが判明したことだ。父の病気に関する論文を幾つ読んでも余命わずかという証拠が積みあがっていくばかりで悲しかった。そんな中、父はある大学の研究者の最近の研究のおかげで、認可されたばかりの薬を投与することによって病状が奇跡的に回復した。

私は今、がんの治療法に関する研究をしている。私が頑張って研究を進めれば、もしかすると父の例のように誰かの命を救えるかもしれないと思うと、研究を頑張りたい、絶対に成果を出したいと思った。

尊敬できる先輩、厳しくも愛のある指導をしてくれる教授など研究環境には恵まれている。それを最大限に生かして研究成果を出したいと思った2020年だった。



龍 偉 (中国)

大学一年の時に尊敬する哲学の先生が授業中に話した「今こそ永遠」という言葉は私が今年2020年に切実に感じ取ったことです。

去年の奨学生交流会に参加する前に、初対面の人々とたった1日の交流で何が生まれてくるのだろうと考えました。走行中のバスの中で手すりを掴まえながら自己紹介をしている学生たちを見て、何だか不思議に感じました。

国籍も違えば大学での専攻も異なり、趣味もそれぞれで年齢もばらつきがあり、これからはこんなに多種多様な人々と一緒にこの1日を過ごすのだなど。見知らぬ人の前では自分の過去と将来がもはや関係がない。「今」を如何に共有できるかが重要であり、その「今」が永遠になるからです。

今年の交流会が誰しもオンラインになるとは予想できなかったであろう。同じ画面を見て同じ時間を共有しているのに、同じ空間にはいなかったことを体験することで「今」の大事さを改めて知らされました。



崔 煌 (韓国)

今年は博士3年次である私にとって不透明な一年であった。博士論文を書きつつ、学会に論文を投稿しなければならず、将来における不確定性による不安は私の心にも重くのしかかっていた。

そのうえ、コロナにより社会が混乱に陥りながらアルバイトでは他大学で週一回の非常勤講師をしており、担当する講義では受講生と自身の健康と安全を確保するために、いつも体の安全を心配しなければならなかった。しかし、幸い論文投稿が順調に進み、担当している授業も無事に行われてきた。2020年が終わろうとしている現時点において、私が思うことを一つ上げるとすれば、社会の状況がどうであれ、私が今現在できることをやり続けるしかないことである。来年には私においても社会においても、いいことが発生するかどうかかわからない。しかし、一つ確かなのは、来年も、今年のように自分に与えられたことをやりながら、不透明な未来をできるだけ透明にさせていくことしか私ができることはないのである。



船富 郁也

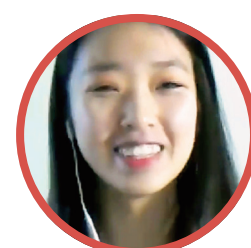
2020年を振り返り、私は戦いの年であったと思います。今年は大学生活最後の年ということで就職活動、研究活動

と多忙な一年でした。

就職活動は新型コロナウイルスの影響により、一時中断や対面がなくなりリモートになるなど予想外なことが起こり、不安になりましたが、無事に乗り越えることができました。

卒業研究では3年生の後期からNaNb₃系反強誘電薄膜の作成と評価について研究を行っていましたが、なかなか結果が出ず、焦りと不安がありました。さらに新型コロナウイルスの影響で研究活動も一時中断する事態となりました。その後、研究生のみ通えるようになり、研究活動を進めていましたが、大学の帰り道に自転車で青信号を渡っているところを車に轢かれ、しばらく大学に通えなくなりました。不運続きでしたが、先日ついに研究成果を出すことができました。今後は卒業研究発表に向け、卒業論文とスライドを作成していきたいと思います。

最後になりましたが、藤井国際奨学金に携わる皆様に重ねてお礼を申し上げます。私が学業に専念してこれたのも藤井国際奨学金財団の皆様の支援があったからこそです。有難うございました。



李 榮賢 (韓国)

多事多難だった2020年も終わりに近づいている。現在も続いているコロナ19の影響で今までは予測もできなかった

変化も多く、その分困惑することも不安になることも多かった一年だった。母国の家族に会いに行く、大学の図書館で本を借りるなど、今までは当たり前なことを二の次にしていたこともあり、その有難さに気付くこともできなかった。

ただ、こうやって日常が失われることは今までの自分が置かれていた環境や今の自分について思い返す機会にもなれたと思う。今まで前に進むことしか考えられなく、周りに目を向けられる余裕もなかった。今回、私が気付いたことは、今の私は周りの配慮や犠牲の産物でもあるということだった。

私を指導している先生がいるからこそその大学院生の私がいて、陰で支えてくれる家族がいるからこそその私がいる。その他にも友人や職場の同僚、いつも支援してくれる方々にも同じことが言える。

しばらくはこの大変な時期が続くかもしれないが、自分が置かれている環境に感謝の気持ちを忘れずに今の私に忠実に生きていきたい。



池側 凌

新型コロナウイルスにより世界が混乱に陥り、今も油断できない状態が続いている。私は大学に通い例年と変わらない環境

で研究ができることに非常に有難さを感じている。世界を見渡せば私のような状態の人は圧倒的に少ないだろう。世界は今の私のような状況の人を1人でも多くしていきたいと動いている。故に私たちは、今日IT業界の発展により急速に技術が向上している世の中で技術発展に後れを取らないようにする必要がある。小学校プログラミング教育の必須化もひとつの答えであると思う。しかし、教師に対しての教育を充実していかなくてはならないといった問題をはじめ様々な課題が出てくる。もっと一般的に言うならば、私たちの世代は行き先が不透明で、将来の予測が困難な時代を生き抜いていくことになるだろう。

私たちは状況をよく観察し、理解し、決断していかなければならない。また、生涯学び続ける姿勢を大切にすることが必要だと私は感じる。



マヒヌリ ズバル (中国)

今年、毎日関心を持っていたことは研究のことと、コロナウイウス感染症のことでした。来日して5年が過ぎましたが、

今年が一番大変な一年でした。

博士論文では「機械学習を用いたTwitterからの乳幼児の子育てに関する情報分類」をテーマに研究を行っています。乳幼児の親がTwitterに発信しているTweet内容について機械学習による自動分析を行い、実験結果をまとめています。

子どもの年齢層、兄弟の人数、投稿内容などに応じて様々な分類を行い、自動分析と実験を行っています。今後は、卒業論文作成と学会投稿の準備を進めます。家族と一緒に住む神奈川からリモートで研究を続けています。コロナのため徳島との往来ができず、不便を感じています。また、自宅で子どもの面倒を見ながらの研究は大変難しいです。子供を保育園に預けて研究に専念したいところですが、感染者数が増加し続けていることや、子どもたちが園内でマスクをしておらず感染リスクが高いことから、11月以降保育園に預けていません。

「研究のやりがい」と「家族」の間で葛藤中です。このコロナ禍で皆さんも苦勞をされていると思います。先が見えず不安もありますが、学部生から続けている知能情報処理分野での研究をさらに深められるよう努めます。



横山 史亮

新型コロナウイルスの蔓延により世の中の状態が一気に変わってしまった。

同時に就活のやり方もオンラインが増えるなどの変化が生じている。そんな世情の中で今私が抱く将来像について記述する。

私は大学入学当初、高校教師を目指す心算であったが、現在は Web エンジニアを目指している。Web エンジニアとはプログラミング技術を用いて IT サービスを顧客に提供する職業である。人の役に立つ仕事という理念はそのままだが、時代の潮流や需要を自分なりに考えた結果、このような進路選択に至った。前述した通り、パンデミックによってテレワークの必要性が増し、ハンコ文化などのローテクな慣習が見直される時代の中で、IT 産業の需要は増加の一方である。実際に 2020 年現在では約 5 倍の求人倍率を記録している。需要の変化はどの時代もあったが、特にエンジニアは新しい技術をどんどん取り入れ変化に対応する必要性があるため世の中の変化に強いという特徴がある。このような理由から私は今目指すべき職業としてエンジニアを選択した。

しかし例えどの職業だったとしても、生涯教育が必要である。

エンジニアという職業もいつ代替されるかもわからない。そのため、学習を常に続け、新しい流れや技術を積極的に取り入れていかなければならない。



勝谷 遊矢

2020 年、スポーツ選手はもちろん、日本中の国民が東京オリンピックを待ちに待っていたのではないでしょう。

ところが世界は一変し、今年の 2 月頃から新型コロナウイルスの感染が拡大し、現在も世界的に感染者数が増えている状況です。この一年を振り返ると多くの人が苦しみ、中には大切な人の命を失ってしまった人も少なくありません。

また、経営不振の影響で仕事を失い、生活することさえも困難な人が多いです。私自身も学費を払うためのアルバイトをすることができず厳しい状況でした。このように当たり前が失われた状況があとどれほど続くのかわからず不安な日々を過ごす中、元の生活を取り戻すためには、皆がどれだけ気を抜かずに行動の一つ一つに責任をもてるかどうかだと思います。だから感染予防に努め、少しでも早く感染拡大を収束させ、いつかあの時は大変だったねと笑って過ごせる平穏な日がやってくることを私は願っています。



藤本 敦巳

私の 2020 年を一言で表せば、「自省」という言葉が最も適切な言葉です。

コロナウイルス感染拡大によって本来あったはずの自由が制限され、今までの自分の時間の使い方を見直す良い機会となりました。これまで何かと理由をつけてやってこなかった資格の勉強なども、何もすることがない時間ができたことによって挑戦することができました。また、自分の将来についても具に考えるよい機会となり、なりたい自分の姿から逆算して今を見つめることができました。

ただ、全体的に見ると仕方ない部分はあるにせよ充実していたとは言い難く、消化不良感の残る一年ではありました。

京都清水寺の今年の漢字は「密」に決まりましたが、僕個人の一年はあまり密度の高いものではなかったため、就活本番の来年こそ密度の高い充実した 1 年を送りたいです。



フミン ホンフク (ベトナム)

新型コロナウイルスの影響で各国の出入国条件変更状況に伴い、外国人が日本に

来られなくなったことは非常に気になっている。例えば、日本の労働力を支えている外国人の技能実習生や旅行で来る外国人観光客や勉強しに来る留学生などだ。今のコロナ禍のため、日本人は経済面の影響だけでなく、外国人との交流する機会、異文化コミュニケーション、語学力を鍛える機会が失われたという大きな影響を受けている。留学生の私は、去年の春休みに母国に一時帰国したとき、コロナ禍のピークになり、半年以上日本に戻れなかった。そして現在大学の授業もほぼオンラインで行われているので、その影響も強く実感した。

そのため自分は今、一人で何ができるか考えてみた。日本人と留学生のクラスメートや多くの外国人の友達と会いたく、コミュニケーションをしっかりとりたいという気持ちを持っているが、やはり一番大事であり、誰でも意識しなければならないのは外出自粛だ。いつかコロナが収まり、外国から来る人との出会いを楽しみに思っている。



丸山 慶

外出自粛が推奨され独り自宅に篋っていると、ふと浪人時代を思い出す。他者との関係を切り、外界への欲望を抑

える様が似ているからだろう。浪人は、私の人生で最も濃い経験であった。以前なら何となく避けていた勉強の中にも楽しさを見出せし、努力の分だけ確かに成長を感じることが出来た。

現在、コロナ禍でアルバイトや通学が出来ないのは苦しいが、その分の時間がなくなった訳ではない。かのニュートンがベスト流行での自粛中に「三大業績」と呼ばれる大発見をしたことは有名だ。つまり、この災禍の中大切なのは、空白の時間を上手く使うことだと思う。

私は来年学部 4 年生だ。今まで勉強してきたことも沢山あれば、進学後に勉強することも沢山ある。先行きが不透明な情勢ではあるが、心配してばかりいる時間を惜しんで机に向かっていく。そんな時にふと、浪人時代を思い出す。



南 祐摩

私は今、知識というものがどれほど不確かであるかをまざまざと感じている。今までの人生においては、既にコンセン

サスが得られている確率された知識を習得してきた。しかし、4 年生になり、自らも研究を行う中で、真実であるかがはっきりしていない、不明瞭な知識が世界中で報告され、議論され、特定の仮説に収束するまでの複雑な状態があることを目にする事ができた。このような体験から、私はコンセンサスが得られている知識も、それを獲得するために複雑で混沌とした無知の状態があったことを身をもって実感することができた。また、そうやってコンセンサスが得られた知識であったとしても、多くの不確実性の上に成り立っているという危うさを抱えているものであると思うに至った。



樋口 恵実

コロナ禍にあった 2020 年を経験して、私は感謝の気持ちを忘れないでいたいと思いました。

生活様式が変化し、私の周りだけでも授業形態や友人との交流の方法など大きな変動がありました。特に緊急事態発令中はさまざまなことが制限され、辛いということもありました。しかし、そんな中でも私の暮らしに大きく困ることはありませんでした。考えてみると、電気や水道などのインフラや流通などは一切止まることなく供給されていました。もちろん病院も平常時と変わらず受診することができていました。自分にとってのあたりまえの生活はこのような事業を支えるあたりまえではない努力の上に成り立っていることを再認識しました。コロナ禍で以前のような学生生活や交流を失ったことは残念でなりませんが、この経験を通じて自分自身が支える立場になれるよう努力するとともに、感謝の気持ちを支える側の方たちに伝えていきたいと思いました。



張 宇 (中国)

2020 年は私にとって特別な一年だと思っています。今年論文を執筆しますが、コロナでずっと在宅して、気持ちがイラ

イラになって論文に集中できない状態でした。気分を変えて落ち着いて生活するまで結構時間がかかりました。この過程では自分の不足なところに気付きました。将来どんな状況に遭っても落ち着いて目の前のことをちゃんとするのは大切です。これは私にとって成長の一步だと思います。またこの一年で特に自分と親達の健康について注意を払いました。以前はよくまだ若いから大丈夫だと考えていましたが、今は健康意識を高めて、体が一番重要だと思います。健康は短時間で変えられるものではなくて、毎日の食生活と運動などいろいろなところから考えなければならないのです。今は主に家で料理を作るので、健康な料理をするのが趣味になって本当にうれしいです。



ディンキエウミ（ベトナム）

最近、就職活動の準備で経済や市場について色々調べた。その中で興味深い研究が見つかり、それについて考えてみた。その研究は不況になると美女が増える「Lipstick Effect」（口紅効果）だ。研究によると景気が不況で社会が不安定になると、女性は普段よりも多く化粧品などの商品を購入するそうだ。その理由は女性が将来のことを考えて交配相手を確保するための行動である。しかし今回のコロナではマスクをつけることで、沢山の口紅を塗っても期待する効果が出ないため、リップスティックよりも目に関する化粧品の方が売られると思う。自分は女性であるが、これまでこの関係性について気付いてなかった。無意識に化粧品を買ってしまって、無意識に頑張ったのだ。また、女性にあげるプレゼントを考える時、特に社会が不安定で不安になった時や自信がなくなってしまった時の女の人に化粧品は良い選択だろう。



伊藤 栄輔

2020年は私のこれまでの人生の中で、最も行動を制限された一年になった。2月下旬から3月の頭にハワイで異文化交流を行って、帰国したときに日本ではティッシュペーパーやトイレトペーパーが買い占めされ、売り切れが続出していた。そして月が経つにつれて大学に入構できなくなり、飲食店の座席がソーシャルディスタンスを意識した配置になった。今年は他大学院に進学するために試験勉強を行う必要があったため、このような措置に少なからず影響を受けた。その入学試験も異例のオンライン実施となり、状況の変化に対応するのに必死であった。今後どのように生活様式が変わっていくのか見当もつかない。情報過多であり、信頼できない噂も流布される現代で、情報を見極めることを大切にしながら、残り少ない大学での生活を満喫しようと考えている。



仮谷 柚希乃

1年前、私は所属する部活の幹部に就任しました。しかし、すぐにコロナウイルスが蔓延し、活動を思うようにできなくなってしまいました。上手いいかないことが続き、辛いと感じてだんだん無気力になってしまうようになりました。しかし、活動の制限が緩和され始め部員の人々と会える機会が増えたことで、私には支えとなってくれる大切な仲間がいる、仲間のために頑張りたいということ思い出すことができました。とても大事なことなのに忘れてしまっていたとその時初めて気付きました。そこからコロナ禍でも前向きにいろいろなことに取り組むことができるようになり、忙しくも充実した毎日を過ごせたように思います。最後の1年間は辛いことも多かったですが、コロナ禍での活動だったからこそ人との繋がりとというとても大事なことに気付くことができ、制限がかかった中でも自分に今できることを頑張るという貴重な体験をすることができました。この経験をこれからも忘れずに大事にしたいなと思います。



金 亜奇（中国）

今年の10月まで学校に行くことができなかったため、毎日家で本を読んだり論文を書いたりするようになりました。最初はどうせすることは前と変わらなく、ただ場所を変えただけなので特に何とも思わなかったのです。そもそも私は進んで友達を作ったり、皆でわいわい遊びに行ったりするような人間ではなく、孤独というものには慣れていたはずだと思ったのです。しかし一人でいる時間が長すぎると、とにかく苛立って、前まで嫌だったコンビニでのアルバイトも毎週の楽しみになりました。そして私が思ったのは自分は予想以上に弱いものであることです。私の今までの人生は一人でいる時間が断然に多いので、自分は強い人間だ、我慢が得意な方だと思い込んでいます。そのため家族と離れて異国に留学するのも躊躇なく決めたことです。しかし今振り返ってみるとそれは断続的なものであって、今年のように長期に亘って一人になるのは初体験です。そして私は必要以上に弱みを見せたくない人生を送ってきたことを認識しました。それは別の意味の「弱い」なのでしょう。



許 亜寧（中国）

私たちはある目標に向かって、自分の計画を立てたり、努力したりする。しかし、気付かないうちに、その目標に束縛されてしまう可能性もある。うまく行かない時は、落ち込んだり、自分を疑ったりするというような経験は誰にでもあるだろう。目標を立てること自体は決して悪くないが、結果を出すことばかり考えてしまうと、その過程が苦痛になるかもしれない。つまり、結果にだけ注目するのではなく、目標に向かって努力する過程を楽しむことが重要ではないかと最近実感している。去年入学してから卒業することばかりを考えて努力していたが、失敗してつまづいていた時期があった。その時の自分は消極的になり、研究に向いていないかと自分を疑うようになった。目標への執着が自分を励ますどころか、むしろ逆効果になっていることに気が始めた。そこで、一旦卒業のことを念頭から外し、まず自分が興味を持っていることから研究を進めることに決めた。その後、研究が楽しくなり、意外なことに小さな成果を収めることもできた。また、自分もその研究で自信がついた。目標を達成するために努力することが大切だが、その過程を楽しむこと自体も価値があるのではないだろうか。



的野 志帆

今年は私にとって我慢と変化の年でした。今年から研究室に配属され、心躍る年頭の研究内容に励んでいます。しかし、コロナウイルスの影響で研究活動に制限がかかりました。また、毎年楽しみにしていた母や友人との旅行、祖父母に会う機会も我慢を強いられ、気持ちが大きく沈み、私が思い描いていた一年と全く異なりました。その為少し投げやりになっている事もありました。私の友人は看護師として今年から働いています。コロナ禍で大変な時に、人の命を救うために日々頑張っています。そんな友人が私の開発した薬を病院で扱うことが夢だと言ってくれました。不自由な環境や逆境に置かれた時にこそ、今まで見えなかったことが見えたり、大切なことに気付かされたりします。友人の言葉を聞いて、改めて私はがんで苦しんでいる人の為の抗がん剤の開発に関わりたくと強く感じました。私が今できることは、勉学に励み社会に貢献できるように、より一層努力することです。



古田 悠真

まず初めに多忙の中、オンライン交流会を開催していただき有難うございました。未だにコロナが猛威を振るう中、自分は個人の対応力を上げる必要性を日々感じています。というのも現在も状況は転々とし先行きも拡大前に比べ不透明になっています。実際に交流会では、大人数での実験ができなくなった代わりに密を避けつつ小人数でローテーションをして実験を進める工夫をしていた人もいました。また自分も大学での一部のゼミが感染状況に応じて対面からオンラインになりました。そこで従来通学に割かれていた往復3時間程度を新たなゼミに費やしたり、本来ならあまり交流することのない他分野の友達とゼミを開催したりしました。またオンラインになったことを機に、遠隔作業や同時共有する方法などを新たに習得できました。平常時では新たなことに挑戦しようとしてもつい目の前のことに追われ、やりたくても挑戦できないということは多々あると思います。しかし現在、コロナという外的要因により、良くも悪くも通常ががらりと変わりました。これを逆に利用して新たなことに挑戦するという個々の柔軟な対応力が問われていると感じています。



趙 月輝（中国）

あっという間に2020年ももうすぐ終わり。今年のコロナウイルスはすべての人の生活に影響を与えた。私も同じく、この一年間ほぼ学校に行けなかった。オンラインというものは科学技術の進歩とは言え、時代の変わりとも言え、すごく便利なものだと思う。しかし、すべての交流がオンラインに変わったら、やはりその悪い面があると思う。例えば、今年すべての交流会はオンラインになってしまった。研究室の飲み会はオンライン飲み会、専攻分野の新歓会もオンライン新歓会、さらに毎年の藤井国際奨学財団の交流会もオンライン交流会になった。交流会は人と人の間の距離感を短縮する重要な役割があり、オンライン交流会はあまりその役割を果たしてなかった。今の時期はしょうがないと思うが、来年深く交流



岩田 大和

日本においてもコロナの感染者が多くなり、対面では実験以外の授業がすべてオンラインになり、電車の車内放送

では感染対策にご協力くださいなどのアナウンスが流れることが日常になりつつあります。

そんなコロナに振り回された一年でしたが、この一年を過ごして今私が思うことはオンラインの力というのは自分で思っているよりも大きいということです。

先日、オンラインで貴財団の奨学生交流会に参加させていただきました。そこで他の奨学生の方々の今現在行っていることや取り組んでいることを聞く機会がありましたが、その時に普段身近でない分野の話も聞くことができました。

自分では気づかないような面から物事を捉えた話を聞いて、自分の物事を捉える視野の狭さに気づかされました。

国を問わず様々な人との交流を通して自分の成長につながる機会を簡単に増やしてくれるオンラインという技術はこれまであまり使用することがありませんでしたが、今年一年の経験を通じてその便利さに気づきました。

これからは対面での交流も大切にしながら、オンラインという技術を用いて、普段交流できない方とも積極的につながり、自分の成長に繋げていきたいと思います。



松本 和人

2019年に生きている人で2020年に起こったことを予測できた人はいるのだろうか。2020年は間違いなく激動の一年であ

ったと言える。コロナウィルスの蔓延、オリンピックの中止、緊急事態宣言によるステイホーム。

挙げればきりが無い。しかし、今年が特別変化の多い年だったろうか。

振り返ってみれば、東日本大震災やリーマンショックなど、大きな変化は少なからず起こっている。

そしてこれからも私たちの生活を揺るがすような出来事が起きる可能性は決して低くない。そんな不安定な時代の中で、力強く生きるために「適応力」をつけていきたい。起こった出来事に対してよくよくせずつどうすれば状況を根本から改善できるかを頭目一杯使って考えて臨機応変に生きていく力をつけていきたい。



郭 崑聳 (中国)

私にとって2020年は難しい年です。今年は大きな変化がありました。新型コロナウイルス感染症の流行のため、

私は一年間マカオに戻っておらず、一年間、家族に会っていません。大学は学生の安全を考慮しており、ほとんど全ての大学のコースはオンラインで実施されています。2020年は大変な年ですが、今年もたくさん

のことを学びました。困難に直面した時に勇敢になる方法を学びました。初めて日本に来た時の興奮と未来への希望を忘れていません。どんなに状況が悪くても、将来の計画を立てる必要があります。藤井国際奨学財団の奨学金は私を大いに助けてくれ、このように困難な時期でも、経済的不安なしに勉強に集中することができました。私は藤井国際奨学財団のご支援に心より感謝申し上げます。私は今でも初志を貫徹して優れた科学者になることを望んでいます。来年の研究室に入る準備として、私は今、量子光学とレーザーについてもっと学んでいます。

2021年にはすべてが良くなると思います。



高田 晴菜

「当たり前」が大きく変わった2020年、私は「前向きに、今できることをする」この大切さを実感しています。オンラ

イン授業で友達と会えず孤独を感じる日々、周りが読めない就活。自分のリフレッシュ方法すらわからなくなり、体調を崩したこともあり。ゼミで取り組むことを心待ちにしていたディベート大会の中止など、何を目標に頑張ればよいかわからなくなった時もありました。

しかし、それを感じているのは私だけではないし、嘆いて変わるものでもない、ならば環境のせいにして終わりたくない。いつしかそう思えるようになりました。この状況下でも目標を持てる活動はないだろうかと少しずつ前向きになっていきました。実際オンラインメインのプロジェクトに参加し、コロナ禍でなければ出会えなかった人々と貴重な経験ができました。「前向きに、今できることをする」自分の境遇を嘆くことも多かったネガティブな自分が、この一年間の経験や様々な人との出会いを通してこの大切さを身にしみています。



劉 玲 (中国)

私は現在、博士課程3年目の学生です。現在卒業に向けて頑張っています。2020年は忙しく充実した年でした。私は財団の奨

学金の助けを借りて、科学研究により多くの時間を費やすことができました。それによって私は2020年に2つの論文を発表することができました。これはまた、私が科学研究に興味を持ち、科学研究を続けるという私の決意を強めました。私は科学研究の過程で成功のための2つの重要な要素は「勤勉な思考」と「継続的な実践」であると理解しました。考えることで、正しい選択をし、正しい決定を下し、間違いを避けることができます。考えた直後に実践すれば、問題を非常に効率的に解決できます。これらを理解できたことが2020年の私の収穫です。とても忙しいですがとても幸せで充実しています。

現在、卒業論文の完成に力を入れており、2021年4月からは就職活動も始めたいと考えています。2020年以上に頑張りたいと思います。藤井国際奨学財団のご助力には感謝しています。私も将来他の人を助けられるような人になりたいと思います。

